

二人の兄弟

島崎藤村

青空文庫

一 榎木の実えのきのみ

皆さんは榎木の実を拾ったことがありますか。あの実の落ちて居る木の下へ行つたことがありますか。あの香ばしい木の実を集めたり食べたりして遊んだことがありますか。

そろそろあの榎木の実が落ちる時分でした。二人の兄弟はそれを拾うのを楽しみにして、まだあの実が青くて食べられない時分から、早く紅くなれ早く紅くなれと言つて待つて居ました。

二人の兄弟の家には奉公して働いて居る正直な好いお爺さんがありました。このお爺さんは山へも木を伐りに行くし畠へも野菜をつくりに行つて、何でもよく知つて居ました。

このお爺さんが兄弟の子供に申しました。

「まだ榎木の実は渋くて食べられません。もう少しお待ちなさい。」とそう申しました。

弟は気の短い子供で、榎木の実の紅くなるのが待つて居られませんでした。お爺さんが止めるのも聞かずに、馳出して行きました。この子供が木の実を拾いに行きますと、高い枝の上に居た一羽の櫃鳥かしどりが大きな声を出しまして、

「早過ぎた。早過ぎた。」と鳴きました。

気の短い弟は、枝に生なつて居るのを打ち落すつもりで、石ころや棒を拾っては投げつけました。その度たびに、榎木の実が葉と一緒になつて、パラパラ落ちて来ましたが、どれもこれも、まだ青くて食べられないのばかりでした。

そのうちに今度は兄の子供が出掛けて行きました。兄は弟と違って気長な子供でしたから「大丈夫だいじょうぶ、榎木の実はもう紅くなつて居る。」と安心して、ゆっくり構えて出掛けて行きました。兄の子供が木の実を拾いに行きますと、高い枝の上に居た樞鳥がまた大きな声を出しまして、

「遅過ぎた。遅過ぎた。」と鳴きました。

気長な兄は、しきりと木の下を探さがし廻まわりましたが、紅い榎木の実は一つも見つかりませんでした。この子供がゆっくり出掛けて行くうちに、木の下に落ちて居たのを皆みんな他の子供に拾われてしまいました。

二人の兄弟がこの話をお爺さんにしましたら、お爺さんがそう申しました。

「一人はあんまり早過ぎたし、一人はあんまり遅過ぎました。丁度好い時を知らなければ、好い榎木の実は拾われません。私わたしがその丁度好い時を教えてあげます。」と申しました。

ある朝、お爺さんが二人の子供に、「さあ、早く拾いにお出なさい、丁度好い時が来ました。」と教えました。その朝は風が吹いて、榎木の枝が揺れるような日でした。二人の兄弟が急いで木の下へ行きますと、檀鳥が高い枝の上からそれを見て居まして、

「丁度好い。丁度好い。」と鳴きました。

榎木の下には、紅い小さな球のような実が、そこにも、ここにも、一ぱい落ちこぼれて居ました。二人の兄弟は木の周囲を廻つて、拾つても、拾つても、拾いきれないほど、それを集めて楽しみました。

檀鳥は首を傾げて、このありさまを見て居ましたが、

「なんとこの榎木の下には好い実が落ちて居ましょう。沢山お拾いなさい。序に、私も一つ御褒美を出しますから、それも拾つて行って下さい。」と言いながら青い斑の入った小さな羽を高い枝の上から落してよこしました。

二人の兄弟は榎木の実ばかりでなく、檀鳥の美しい羽を拾い、おまけにその大きな榎木の下で、「丁度好い時」までも覚えて帰つて来ました。

二 釣りの話

ある日、お爺じいさんは二人の兄弟に釣りの道具を造つて呉くれると言いました。

いかにお爺さんでも釣りの道具は、むずかしからう、と二人の子供がそう思つて見て居いました。この兄弟の家の周囲まわりには釣竿つりざお一本売うる店がありませんでしたから。

お爺さんは何処どこからか釣針さかを探して来きました。それから細い竹を切つて来きまして、それで二本の釣竿を造つくりました。

「針と竿が出来ました。今度は糸の番です。」とお爺さんは言つて、栗くりの木に住すむ栗虫くりむしから糸を取りました。丁度お蚕かいこさまのように、その栗虫からも白い糸が取れるのです。お爺さんは栗虫から取れた糸を酢すに浸ひけまして、それを長く引延ひしました。その糸が日に乾かわいて堅かたくなる頃ころには、兄弟の子供の力で引いても切れなほほど丈夫で立派なものが出来上ありました。

「さあ、釣りの道具が揃そろいました。」と言つて兄弟に呉くれました。

二人の子供はお爺さんが造つた釣竿を手に提さげまして、大喜びで小川の方へ出掛でけて行いきました。小川の岸には胡桃くるみの木の生はえて居いる場所がありました。兄弟は鰻かじかの居いそうな石の間を見立てまして、胡桃の木のかげに腰を掛けて釣つりました。

半日ばかり、この二人の子供が小川の岸で遊んで家の方へ帰って行きますと、丁度お爺さんも木を一ぱい背負つて山の方から帰つて来たところでした。

「釣れましたか。」とお爺さんが聞きますと、兄弟の子供はがっかりしたように首を振りました。賢いお魚は一匹も二人の釣針に掛りませんでした。

その時、兄弟の子供はお爺さんに釣りの話をしました。兄はゆっくり構えて釣つて居たものですから釣針にさした餌は皆な鰍に食られてしまいました。

弟はまたお魚の釣れるのが待遠しくて、ほんとに釣れるまで待つて居られませんでした。つい水の中を掻廻すと、鰍は皆な驚いて石の下へ隠れてしまいました。

お爺さんは子供の釣りの話を聞いて、正直な人の好きそうな声で笑いました。そして二人の兄弟にこう申しました。

「一人はあんまり気が長過ぎたし、また、一人はあんまり気が短過ぎました。釣りの道具ばかりでお魚は釣れません。」

青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1989（平成1）年10月15日48刷

底本の親本：「赤い鳥 復刻版」日本近代文学館

1968（昭和43）～1969（昭和44）年発行

入力：舞

校正：Julki

2000年2月15日公開

2005年12月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人の兄弟

島崎藤村

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>